

における29年—32年の世界大恐慌の打撃は、甚だしく主要輸出品であるコーヒー価格下落、輸出不振のもとで経済危機が深まり、政治も大混乱期にはいった。30年の大統領選挙では従来の支配層の代表であったサンパウロ州その他の州のコーヒー栽培大地主と商業資本家のブロックの推す候補がミナスジェライス州その他の州のブルジョア・地主候補ジェットウリオ・バルガス（もとリオ・グランデ・ド・スル州知事）を打ち破った。しかし同年10月バルガスは将校団と結んでクーデターをおこして権力を握り以後15年間この独裁政権は続く。第二次世界大戦にさいして、ブラジルは連合国側について参戦し、44年イタリアに出兵した。戦後国際的 antifascism 戦線の勝利の下で、国内の民主主義運動も高まりその圧力の下にバルガスも、普通選挙法や政党活動の自由を認めざるを得なくなった。永年非合法だった共産党も合法化され、45年5月投獄されていたブラジル共産党の書記長で伝説的な「希望の騎士」カルロス・プレステスも釈放された。しかし45年10月の大統領選挙をまえに、反動勢力は民主革新勢力の躍進を恐れ、アメリカの援助の下で陸軍にクーデターを起こさせた。そしてその圧力でバルガスは辞任する。結局陸相のドウトウラ将軍が大統領になり、アメリカ資本と結んだサンパウロ、リオ・デ・ジャネイロ、ミナス・ジェライス各州出身のブルジョアジーを中心とする政府が樹立された。しかしこの政府の対米従属外交、経済状態の悪化、反民主政策に人民の不満は高まり、50年末の選挙では労働党や社民党の推すバルガスが勝利し、大統領に返りさいた。

しかしバルガスが行った民主的、民族的諸政策に不満をもつアメリカ及び軍部（空軍）の圧力により54年10月バルガスは自殺におこまれ

てしまった。そして55年10月の大統領選挙では、社会民主党のジュセーノ・クビチュクが反動勢力を打ち破って当選し、大規模な外資導入の下で工業化、国土開発計画を実施した。しかしそれと同時にインフレが高まった。

60年1月には農地改革、対ソ復交、キューバ支持をかかげるジャニノ・クアドロスが大統領選挙で当選した。しかし61年8月、軍部の一部をふくむ反動勢力の圧力によってクアドロスは大統領を辞任させられ、副大統領のグラールが政権をついた。グラール大統領は民族的独立と自主外交土地改革令、精油所国有化など民主的、民族的な政策をとった。これに反発して64年3月31日軍のクーデターが勃発した。その後ウンベルト・カステロ・ブランコ将軍の独裁政権（1964—67年）、コスタ・エ・シルヴァ（68—69年）政権と軍人独裁政権が続いた。この状況の下で、都市ゲリラ闘争が勃発する。二代目の軍人大統領エミリオ・メディシ（69—74年）は強硬手段によって都市ゲリラを鎮圧し、外資導入・地域開発、輸出拡大政策を行なった。74年3月、四代目の軍人大統領エルネスト・ガイゼルは漸進的民政移管の方針を明らかにしたが、73年末の石油危機によって国内経済は大打撃をうけていた。79年3月、ガイゼルと同じ軍部内知識人グループに属するジョアン・フィゲレドが五代目軍人大統領に就任し、民主化措置を推進し任期終了時に民政移管をすることを公約した。85年3月にはサルネイ大統領の下でついに民政復帰が実現した。

しかしインフレの激化、通貨切下げと経済の困難が続き84年9月末現在で累積債務は986億ドルに達し、開発途上国中最大の債務国となっている。

翻 訳 (石堂 清倫)

1. 序 言

1966年と1968年のあいだに、すなわち1964年に発足したブラジルの独裁体制の内的諸矛盾が、

文化の分野でまだある程度自由の余地を認めていた時期に、出版界で大胆な企画が見られた。それまでポルトガル語では未発表のアントニオ・グラムシの重要著作のうち五点がわずか3年

のあいだに出版されたのである。¹⁾ こうしてブラジルの読者はグラムシ著作集を利用できるようになったが、その範囲がひろい点では、フランス語、英語またはドイツ語の読者には及びもつかないことであった。²⁾

はじめのうち、この出版企画の結果は、どちらかといえば大したものではなかった。グラムシの本の売れゆきは、はかばかしくなく容易なことではなかった。この時期のブラジルの知的生産におよぼした影響は実際には無いにひとしいか、たまにあっても地下的なものであった。ブラジルにおけるグラムシの受容が、1968年12月の第5団体法の公布によって危険にさらされたことに疑いはない。この法は例外措置をさだめたもので、これによって新たなクーデタが実行され、言論と理論上の省察の合法的余地がほとんど完全にとぎされてしまった。しかし、政治上制度上の不利な条件は、グラムシが一時的に影をうすめた理由を部分的に説明するにすぎない。これに劣らず重要なもう一つの理由は、当時ブラジルの左翼文化界を支配していた文化そのものに求められる。それは伝統的に《第3インタナショナルのマルクス主義》、あるいはもっと端

的にいえば《マルクス・レーニン主義》の解釈モデルにつよく影響された文化である。

このように第3インタナショナルの伝統が有力なことは、いちじるしく経済主義的なマルクス主義の一般概念だけでなく、ブラジルの現実の解釈の仕方のうちにも現われている。ブラジルは《おくれた》半植民地的・半封建的な社会構成体とみなされ、——その矛盾を克服し、社会的進歩の道を見いだそうとするなら——《ブルジョア民主主義》革命または《民族解放》を必要とするものとされた。それが、すくなくとも30年代いらい、ブラジル共産党の立場であった。ところが、1964年このかたブラジル共産党の立場から離れて、毛イズムの思想的政治的影響と、レジス・ドブレの《根拠地》(fuoco)論の影響を受けて武力闘争の道をえらんだグループもまたこの第3インタナショナル的大綱と結びついていた。たとえば、カルロス・マリゲラがつくりだし領導している集団も、民族解放同盟と自称し、反封建・反帝国主義革命の即時実現をきめている。

だから戦術と戦略における実質上の不一致にもかかわらず、ブラジル共産党の《漸進主義》と極左の諸グループの《軍事主義》をつなぐ何かがあったのである。つまり、ブラジルはおくれた国であるから、ポリシェヴィズム、または毛イズムまたはカストロ主義の革命モデルを採用しなければならないのだという信念がそれである。この時期には、この国が——大方は軍部、テクノクラシー体制の経済政策によって——完全な意味での資本主義的發展の水準に、それどころか国家独占資本主義の水準に到達した事実を理解したブラジル知識人は多くはなかった。

独裁のもっともおくれた立場と、ブラジル・マルクス主義の第三インタナショナル志向のあいだの補完性は、奇妙ではあっても逆説的ではなく、そのことが当初におけるグラムシの著作受容のうえで記録された困難性を説明している。だから前者の衰退と後者の危機とが原因となって、最近10年間のグラムシの影響が目を見はるよう増大したのは偶然ではない。70年代後半から、すなわち、政治的自由化過程の（まだお

1) 以下がその表題である。

C.N. Coutinho および L. Konder 編 *Concepção dialética da história* [史的唯物論とベネデット・クローチェの哲学], 1966。

N. Spinola 編 *Cartas do cárcere* [獄中からの手紙], 1966。

C. N. Coutinho 編 *Literatura e vida nacional* [文学と国民生活], 1968。

C. N. Coutinho 編 *Os intelectuais e a organização da cultura* [知識人と文化の組織], 1968。

L. M. Gazzaneo 編 *Maquiavel, a política e o Estado moderno* マキアヴェッリ, 政治および現代の君主についての覚え書], 1968。

以上はすべてリオ・デ・ジャネイロの *Editoria Civilização Brasileira* 発行。

2) 大きな例外はスペイン語のもの。ブエノス・アイレスの Ediciones Lautaro が《獄中からの手紙》(*Cartas desde le cárcel*) 初版の翻訳を刊行した1950年から、1962年までに、グラムシの全著作がアルゼンチンで、ついで1966—1968年にブラジルで刊行された。ポルトガル語とスペイン語でのグラムシの著作が、ポルトガルとスペインでなく、まずラテン・アメリカで(しかも今日まで大量に)刊行されたことが特筆される。

ずおずとした) はじまりや、伝統的マルクス主義組織のますます顕在化した危機と時をおなじくして、グラムシの著作がひろく研究され論議されはじめた。1966—1968年間に刊行されていたものが、1976年いごになり何回も再刊され、グラムシの著書、また彼について書かれた新しい標題の本が相ついで現われた。³⁾ 《獄中ノート》の著者の本の普及は、諸大学の境界をはるかに超えるものがあつた。グラムシの基本概念のあるもの、とくに《市民社会》の概念は、近來ブラジルの共産主義者、社会民主主義者、キリスト教進歩派、さらには自由主義者側の発表した政治的、歴史的的分析の多くのなかでますます多く利用されるようになった。だから、グラムシが今日ではブラジルの知的生活のなかでそれにふさわしい空間をかちとつたということができ、ブラジルの左派をまきこんだ苦難の理論的政治的革新過程のなかでの活力となり、欠

3) 現時点(1985年9月)で *Concepção* は第5版、*Cartas* は第3版、*Os intelectuais* は第4版、*Literatura* は第3版、*Maquiavel* は第6版に達した。さらに、サン・パウロの書肆 Martins Fontes Editora は M. Cruz 編のグラムシ選集 (*Obras Escolhidas*) ——はフランス版選集 (Editions Sociales, 1959) を底本とするポルトガル版 (Lisbona, Estampa, 1971) の復刊——を発行した。A. A. Noueira 編の論文 *Alguns temas de questão meridional* [南部問題についての若干の主題] が雑誌 *Temas de ciências humanas* (1977, No. 1) に掲載され、同誌はまた例のリオン・テーゼのポルトガル訳をも掲載した(1980, n. 9)。*Ordine Nuovo* 期の論文集が *Gramsci-Bordiga, Os conselhos de fábrica*. (São Paulo, Brasiliens, 1981) に含まれている。ブラジルの著者たちによるグラムシ文献目録は、多くの研究や論文のほか、つぎの3点がある。Mário Innocenti, *O conceito de hegemonia em Gramsci*, São Paulo, Tecnos, 1979. Carlos Nelson Coutinho, *Gramsci*, Porto Alegre, L & PM Editores, 1981. Elimar Nascimento, *A universalidade de Gramsci*, Campina Grande-Recife, Editora da Universidade da Paraíba, 1983。

ブラジルでは1977年いご Luciano Gruppi, Maria Antonietta Macciocchi, Giuseppe Fiori, Laurana Lajolo, Norberto Bobbio, Hugues Portelli, Christine Buci-Glucksmann, James Joll のグラムシについての著書が訳出されている。Editori Riuniti 刊の論集 *Politica e Storia in Gramsci* の第一巻も発行されている。

くことのできない準拠点となっている。

2000ページ以上の《獄中ノート》のなかでたった一度しかブラジルに言及していない⁴⁾ グラムシが、このようにブラジルによって《養子》にされたのはどう説明できるのだろうか? この問いにたいする答が見いだされるのは、明らかかなように、その方法と基本概念の面においてであり、文字による主張の面ではない。それはグラムシがわが国の国民的特殊性のいくつかの決定的な側面を解明することができたその深遠な普遍性をつうじてであった。私はここでこれらの概念のうちの2つのものについて論ずることとする。1つは、ブラジル史の標識となる《保守的近代化》⁵⁾ 過程の分析に重要な示唆を提示することができそうに思われる《受動的革命》の概念であり、いま1つは、《拡大された国家》の概念である。この拡大された国家の概念をつうじて、わが国の現状況——すなわち今日のブラジルが《西方》型の社会的構成体であるとする事実——のいくつかの本質的特徴を明らかにし、したがって、同時にブラジルにおける社会主義のための民主主義的戦略をつくりあげる手がかりをあつめることができるのである。

2. 《受動的革命》とブラジルの歴史

マルクス・レーニン主義の伝統によって主張されているのはちがって、ブラジルは、ジャコバン・モデルにしたがって《ブルジョア民主主義革命》または《民族解放》の実現を余儀なくされることなしに、資本主義的近代化の過程を経験した。前資本主義的大土地所有 (latifundo) と帝国主義への従属とは、国の完全な資本主義的發展にとって乗り越えられない障害

4) ブラジルについての短かい言及(ラテン・アメリカにおける知識人の役割についての興味ある観察のなかでなされている)は Valentino Gerratana 編 *Antonio Gramsci, Quaderni del carcere*, Torino, Einaudi, 1975 の1528—1529 ページにある。

5) よく知られているように、これは Barrington Moore jr. の表現である。 *Le origini sociali dittatura e della democrazia*, a cura di L. Galino, Torino, Einaudi, 1969。

でないことがわかった。一方では、ラティフォンドの大土地所有は、「上から」漸進的に、資本主義的大農業企業に変化し、他方では、国内市場の国際化につれて、外国資本の参加が、高度の都市化と複雑な社会構造をもつ近代工業国へのブラジルの転換をつよめるのに力をかけた。この二つの過程とも国家の行動によって増進させられた。人民運動のはげ口となる代りに、すなわち、農民と都市勤労者の大衆の先頭に立つ革命的ブルジョアジーのみちびく過程をたどることなしに、経済的に支配する諸階級分派の協定と、人民勢力の排除と、抑圧装置と国家の経済的介入の不断の利用とのおかげで、資本主義的転形が生じたのである。この意味で、ブラジルが（政治的独立から、共和制の布告と1930年の革命を経由して、1964年の軍事クーデタにいたるまで）資本主義への移行に直接また間接に当面してとったすべての具体的選択は、「上からの」、すなわちエリート的で反人民的な解決を見つけたのである。

「プロイセンの道」というレーニンの見解は、この上からの転形過程を解釈する鍵となったのであるが、ブラジルの現実を分析するうえで利用されるようになったのは、ほんの最近のことである。⁶⁾ とにかく、レーニンの概念を、とく

6) 「プロイセンの道」の概念をつかってブラジルの歴史の側面を分析した著者には以下の人びとがいる。

Carlos Nelson Coutinho, *O significado de Lima Barreto na literatura brasileira*, in Aa Vv., *Realismo e antirealismo na literatura brasileira*, Rio de Janeiro, Paz e Terra, 1974, pp. 1-56 と, *A democracia como valor universal e outros ensaios*, Rio de Janeiro, Salamandra, 1984².

J. Chasin, *O integralismo de Plínio Salgado*, São Paulo, Ciências Humanas, 1978, pp. 621 sgg.

Luiz Werneck Vianna, *Liberalismo e sindicato no Brasil*, Rio de Janeiro, Paz e Terra, 1984.

Marco Aurélio Nogueira, *As desventuras do liberalismo: Joaquim Nabuco a Monarquia e a República*, Rio de Janeiro, Paz e Terra, 1984.

以上すべての著者はレーニンの「プロイセンの道」の概念をグラムシの「受動的革命」の概念によって補完している。

に過程の構造的側面に向けてみると、この移行様式に随伴し、多くの場合これを規定する上部構造的特徴を十分に説明するに足りない。だから、ブラジルに「プロイセンの道」の概念を適用しようとする近來の試みがほとんどいつでもグラムシの「受動的革命」の概念によって補完されるのは偶然ではない。この概念が、その他すべてのグラムシの概念がそうであるように、上部構造的契機、とりわけ政治的契機をつよく力説し、それによって経済主義的傾向を克服するに依じて、それがブラジルの資本主義への道、国家がしばしば主役をはたすことになる道を見さだめ、分析するうえで、はかりしれない効用があることが示されたのである。

グラムシにかんする文献は、今日では、「受動的革命」あるいは「革命—復古」の概念が「獄中ノート」にふくまれる省察のなかできわだった地位を占める⁷⁾ことを認める点で一致している。この概念は、グラムシがイタリアにおける近代ブルジョア国家の形成をえがくために（リソルジメントの推移をえがくために）利用しただけでなく、イタリア資本主義の独占段階への推移の本質的特点をえがくためにも利用した鍵となる用具であり、ファシズムをば「受動的革命」として示している。なお、この概念はグラムシによってより一般的な解釈基準として利用されている。たとえば、アメリカのフォードの経験はこの概念にてらして解しようという彼の示唆を思うべきであろう。⁸⁾このように一般化する可能性があることからして、とりわけクリスティーヌ・ビュシ-グリュックスマンとゴラン・テルボルンが、第一次世界戦争後の時期に、受動的革命の概念にもとづいてヨーロッパ社会民主主義派の行動を分析するのは——私の考ではなっとくできるものであるが——許されるのである。⁹⁾私としては、わが歴史的構成体の基

7) たとえば論集 *Politica e storia in Gramsci*, Roma, Editori Riuniti, vol. I 1977 における Christine Buci-Glucksmann と Franco di Felice の論文がそうである。

8) 「獄中ノート」, p. 2140

9) Christine Buci-Glucksmann et Gorän Therborn, *Le défi social-démocrate*, Paris, Maspero, 1981.

本的特点を明らかにするうえでこの概念をブラジルの場合に適用すれば大きな効用がありうると確信しており、このあといくつかの実例を提供するつもりである。

グラムシの受動的革命の概念がもっているいくつかの特徴を手みじかにあげておこう。まず第一に、受動的革命の過程が、人民的な、「下からの」、ジャコバン的な革命とちがって、いつでも二つの契機が存在を伴っていることを強調したい。「復古」（「下からの、本当の、急進的な変革の可能性にたいする反動として」）の契機と、「革新」（人民の要求の多くのものが旧来の支配層によって吸収され、実行されることを意味するかぎり）の契機とである。だからグラムシは「イタリアの歴史の発展において統一的な人民の主導性が欠けていたという歴史的事実と、その発展が人民大衆の散発的、初歩的、非組織的な破壊活動にたいする支配階級の反動として、下からの要求のある部分に同意する〈復古〉、したがって〈進歩的復古〉あるいは〈革命—復古〉あるいはまた〈受動的革命〉をとまなっておいたというもう一つの事実」をあらわしていると主張する。¹⁰⁾

しかし、この「復古」の側面は、本当の変化が生ずる事実を抹殺するものではない。グラムシは別の節でこう言っている。「諸勢力のこれまでの構成を実際に漸進的に変化させ、したがって新しい変化の母体となる分子的变化の解釈基準を受動的革命の概念に適用する（そして、イタリア・リソルジメントについて文書で立証する）ことができる」。¹¹⁾

ブラジルで起った「上からの」主要な変革のなかでも、グラムシが明らかにした2つの契機の存在を文書によって立証するのは困難ではないであろう。實在の、または潜在の人民運動にたいする反動として、支配階級は「復古」に打ちこんだ。それは、結局のところ、階級構成のうちに重要な変化をうみだし、現実の新しい変

革のための道を準備した。ここで私は、かなり象徴的な一つの例を論じたい。それは1937年のバルガス独裁の樹立である。この年は、ブラジル共産党の創立と、最初の少壮将校（tenentes）の軍事反乱の年である1922年にはじまる激動期の到達点である。この時期に、労働運動は市民的、社会的権利をかちとるためにたたかい、一方、出現してきた都市中間層はより大きな政治参加を要求したのである。この「下からの」の圧力は（「散発的、初歩的な破壊活動」の形態をとったことがしばしばあった）、支配的な農業寡頭層の一部、すなわち国内市場のための生産とより多く結びついていた部分を、いわゆる1930年革命の先頭に立たせるにいたった。このことは新しい権力ブロックの形成をとまなしたが、そのブロックの内部で寡頭層のうち輸出農業と結びついている部分は従属的な立場におかれるようになり、それと同時に、この層は中間層の政治的・軍事的指導部（少壮将校団）の穏健な一翼を自分たちに組みこもうと努めた。しかし、この新しい権力ブロックのエリート的性格のために、人民の諸層は疎外された。彼らはまだ不十分にしか組織されておらず、弱い共産党とプレステスをふくむ左派の少壮将校の小グループによって代表されるにすぎなかった。この左派将校団は1930年の革命に参加することを拒否したのである。このような条件のもとで、革命のエリート性格にたいする抗議のはげ口となったのは、「初歩的な破壊活動」の採択であり、1935年の一揆、共産主義者と左派少壮将校団のあの無残な共同のイニシアティブがそのきわだった現われであった。

この一揆は、話にならぬくらい安々と政府に鎮圧され、バルガス独裁樹立の主だった口実とされた。とはいえ、バルガス「新国家」は、その弾圧的性格と、ファシズム型のイデオロギー的装束にもかかわらず、ブルジョア階級中の工業分派と軍部の支持をえて、加速的な国の工業化を促進し、他方では、多年のあいだプロレタリアートが要求してきた一連の労働保護法（最低賃金、有給休暇、年金権、等々）を促進した。もっとも、ムソリーニの労働憲章から直接借り

10) 「獄中ノート」, pp. 1324—1325. 合同出版社版グラムシ選集, 第2巻, pp. 94—95

11) 「獄中ノート」, p. 1767, 三一書房版「獄中ノート」, p. 130.

てきた協調組合立法の押しつけという犠牲を払ってのことであったが、それによって組合を国家機構に結びつけ、その自主性をなくしたのである。だから、バルガス独裁は、グラムシふうの「受動的革命」または「進歩的復古」と定義することができる。¹²⁾

だがグラムシは、彼のイタリア史分析のなかで、受動的革命の概念の適用を資本主義の強化の時期に限定したのではなく、資本主義の自由主義段階から独占段階への移行を説明する鍵としてもこの概念を適用している。「国家の立法的介入により、また協調組合の組織化をつうじて、〈生産計画〉の要素をつよめる大なり小なり深刻な変化が国の経済構造にひきいられるであろう。すなわち、個人と集団の利潤の収奪に触れることなしに（またはその規制と統制だけに限定して）生産の社会化と協同化がつよめられるであろう。この事実のうち〔ファシズムによる〕受動的革命があろう。イタリアの社会関係の具体的な枠組のなかでは、伝統的指導階級の指導のもとで……工業の生産力を発展させるにはこれが唯一の解決となりうるであろう」。¹³⁾

この指摘は、1964年後にブラジルに打ちたてられた独裁体制の目的を理解するのに大いに役立っている。それは、あとで見るように、「古典的」ファシズム体制として表示するわけにいかないが、その経済政策上の諸目的は、イタリア・ファシズムのそれと強度の類似性をもっている。工業生産力は、巨大な国家介入をつうじて、独占資本主義の強化と拡大をたすけるために、強度に発展させられた。農業構造は、それを支える主軸としての巨大土地所有制を保存しながらも、深刻に変形され、今日ではすぐれて資本主義的である。国家装置を手中におさめたテクノクラート—軍人の層は、そのうえに、「多くの資本」の利益を「資本一般」に従属させるに応じて、私的資本の行動を統制し制限し

た。しかし、この「カエサル主義的」立場をとったのは、まさに私的利潤の原則を維持し強めるためであり、伝統的支配階級の権力を維持するためなのであって、それが工業ブルジョアジーのものであれ、金融ブルジョアジーのものであれ、民族ブルジョアジーのものであれ、国際ブルジョアジーのものであれ、また日ごとに資本主義化しつつある大土地所有者のものであれ、だれの権力であるかを問わないのである。

軍人—テクノクラート体制は、ある時点で、中間層の広大な部分の同意を獲得することに成功した。それに成功したのは、ほかでもなく、あの近代化の事業の主役になったからであり（もっとも近代化といっても、それは同時に「後進性」の要素のいくつかを保存し、再生産したものであった）、また1964年に敗北した諸社会集団の要求のいくつかを吸収し、それにこたえたからでもある。要するに、ブラジルの独裁の場合の成功には、グラムシがイタリア・ファシズムの場合に指摘したのに似たものがある。「政治的にまたイデオロギー的に重要なのは、それ〔ファシズム的近代化モデル〕が、とりわけ都市と農村の小ブルジョアジーの大衆のような、いくつかのイタリアの社会集団のあいだで、期待と希望の一時期をつくりだし、つぎに、伝統的諸指導階級が操ることのできるヘゲモニー体制と軍事的・市民的強制力とを維持するのにふさわしい力能をもつことができ、また実際に持ったことである」。¹⁴⁾

3. トラスフォルミズモと国家の強化

だから、受動的革命の概念は重要な解釈基準¹⁵⁾を成している。ブラジル史の大きなエピソードを理解するためだけでなく、それどころか、

14) 《獄中ノート》, p. 1228, 合同版グラムシ選集, 4—345。

15) グラムシが受動的革命を「実証的に」読む可能性をはつきりと拒否していることが指摘される。「だから、受動的革命の理論は、リソルジメントのイタリア自由主義者のあいだに見られたように、綱領としてのものではなく、支配的に活動するほかの分子がいない場合の解釈基準としてのそれである」。「獄中ノート」p. 1827。

12) この時期は Luiz Werneck Vianna により、グラムシの概念をもちいて分析されている。 *Liberalismo e sindicato no Brasil*. pp. 128 e sgg.

13) 《獄中ノート》, p. 1228, 合同版グラムシ選集 4—345。

より一般的にみて、わが国が資本主義的近代への、近ごろでは国家独占資本主義への全移行過程を理解するためのものである。その結果として、また、ブラジルの政治的・社会的構成の決定的特点を明らかにするのに適した分析の要具をわれわれにもたらすことができたのである。グラムシによって指摘された受動的革命の二つの因果関係について注意をうながしたい。一方では、市民社会の不利となる国家の強化、あるいは、もっと具体的にいえば、ヘゲモニー形態の不利となる独裁的覇権形態の優位である。他方では、人民大衆の排除を招来する歴史的展開の様態としてのトラスフォルミズモの実践である。リソルジメントにおけるピエモンテの役割を検討したうえで、グラムシは、ブラジルにも適用しうる観察をしている。「この事実は〈受動的革命〉の概念にとって最大の重要性をもっている……重要なのは、受動的革命のなかで〈ピエモンテ〉型の役目をもっている意義をふかめること、すなわち、一国家が革新の闘争を指導するうえで地方的社会集団にとって代る事実である」¹⁶⁾

たしかに、リソルジメントとブラジルの場合とのあいだに根本的相違がある。イタリアでは特定の一国家が単一民族国家を建設するうえで決定的な役割をはたしたのに、ブラジルで受動的革命の主役の役目をはたしたのは、すでに一民族国家であった。しかし、この相違は、軽視できないとはいえず、ブラジル国家が、グラムシの言うようにピエモンテがはたしたのと同じの役割を歴史的にはたした事実につきあわせてみると、後景に退くように見える。ピエモンテは、移行の諸過程の主役たる役目のうえで、経済的に支配しているおなじ階級を政治的に「指導」する任務のうえで、諸社会階級の代りをつとめたのである。さらにいえば、この過程の結果は、ブラジルの場合には、グラムシがイタリアについてつぎのように述べた状態とつよい類似性をもっている。「これは、これらの集団のなかで〈指導〉ではなく、〈支配〉の役目が出ている場

合の一つである。ヘゲモニー抜き独裁である。ヘゲモニーは、ある社会集団の一部分から集団全体に及ぶものであり、〈ジャコバン〉モデルにもとづき運動をつよめ、これを急進化する等々のために、この集団から他の諸勢力に及ぶものではないであろう」¹⁷⁾

ブラジルでも、変革は、いつでもヘゲモニー機能が支配階級のある分派から他の分派に移動する結果として生じた。しかし、これらの分派は全体として、人民大衆にたいして今日まで有効なヘゲモニー機能をはたしたことがない。彼らは政治的「指導」の機能を国家に——すなわち軍部とテクノクラートに——委任することをえらんだ。「統制し」、必要なときは従属的諸階級を弾圧する任務が国家にかかった。しかし、資本主義への移行のこの反ジャコバンの様態は、ブラジルのブルジョアジーが彼らの「革命」を徹底させなかったことをすこしも意味するものではない。まさしく受動的革命モデルをつうじてそれをおこなった。それは、フロレスタン・フェルナンデスの用語を借りていえば、「長びいた反革命」¹⁸⁾の形をとった。それは「ヘゲモニー抜き独裁」を言いかえたものである。

だが「ヘゲモニー抜き独裁」は、受動的革命の主役である国家が、最小限の同意を度外視してよいことを意味するものではない。さもなければ、それはつねに強制だけを利用せざるをえない。そのことは、とどのつまりその働らきを不可能にするであろう。だからこそグラムシは、「上からの」移行過程が存在する場合にこの最小限の同意がかちとられる様態を指摘したのである。グラムシはトラスフォルミズモを語っている。すなわち、おなじ支配階級中の敵対する分派、または従属階級の諸部分を、権力ブロックの側が吸収することである。グラムシは、

17) 「獄中ノート」, p. 1823.

18) Florestan Fernandes, *A revolução burguesa no Brasil*, Rio de Janeiro, Zahar Editores, 1975, pp. 310 sgg. グラムシは文献目録に引いてあるにすぎないが(しかもリストにあげられた名がリソルジメントであるのは意味がふかい)、フェルナンデスのこの根本的労作におけるグラムシの影響は明白なようである。

16) 「獄中ノート」, p. 1823.

トラスフォルミズモと受動的革命のあいだの有機的關係を確定したうえで、イタリア史上のトラスフォルミズモの二つの時期を指摘する。

- 1) 1860年から1900年までの《分子的》トラスフォルミズモ。すなわち、民主主義的反対党から分泌された個々の政治的人物が、保守・穏健派の《政治的階級》に個々に組み入れられた時期（この保守・穏健派の特徴は、人民大衆の国家生活へのいかなる介入も、剥きだしの独裁的《支配》のかわりに《ヘゲモニー》をもちだすいかなる有機的改革も嫌悪することである）。
- 2) 1900年以後のトラスフォルミズモは、極端派の諸集団全体をあげてのもので、彼らは穏健党の陣営に移った。¹⁹⁾

トラスフォルミズモのどちらの型もブラジル史上に見きわめることができる。《分子的》様態のほうがたしかによりひんばんであり、反対派の政治家が権力ブロックに組み入れられる形で現われ、帝国時代から近來の独裁期に及ぶ過程である。そして《分子的》トラスフォルミズは、われわれの文化生活のなかで、従属的諸階級の価値を、現実にも潜在的に代表する知識人の多数のものを、国家の方で吸収することをつうじて、決定的な役割を、おそらくいつそう否定的な役割をはたしてきた。これらの知識人は、しばしば国家官僚制に組み入れられた。この官僚層は、ポルトガルの植民化を受けつぎ、帝国時代に強化されたものであり、共和国時代全期にわたり、資本主義を準備しまたは強化する政治的および経済的変革の主役となってくるにつれて、たえず増大しつづけた。このトラスフォルミズモの作用は、知識人との関係では、市民社会、ことに《私的》文化組織の弱さによって、疑いもなく容易にされている。このことが、国家に吸収されない知識人の物質的生計そのものをむしろ困難にした。²⁰⁾

19) 《獄中ノート》, p. 962.

20) ブラジルの知識人にたいするトラスフォルミズモの影響、とりわけ国民的・人民的文化を仕上げるうえでの困難さは、私の論文 *Cultura e democracia no Brasil* のなかでグラムシの諸概念を利用して検討してある。この論文ははじめ1979年に発表され、いまは C. N. Coutinho, *A democra-*

しかし、ブラジルの歴史のなかでは、反対派の諸集団全体または諸社会階級を吸収する企てさえあった。多くの点からみて、《人民主義》——これは1937年から1945年までのバルガス独裁期のあいだにはじまったが、1945年から1964年までの自由民主主義期に十分に発展したカリスマ的な正当化の一樣相である——社会的権利と実質的な経済的利益を容認することをつうじて、都市の勤労サラリーマン層を、権力ブロックに、従属的な地位に組み入れる試みと解釈することかできよう。この場合、トラスフォルミズモの作用は完全に成功したわけでない。それは労働者階級のより戦闘的な部分の抵抗のせいによるだけでなく、とくに経済恐慌期にそうであったが、勤労者全体に《人民主義的》協定の実施上必要とされる最低の物質的基準を保証することができなかったためである。しかし人民主義的な正当化形態が、とくに第2次バルガス政府期（1950—1954）と、クビチェック政府期（1955—1960）に相対的な成功をおさめたことに疑いはない。この時期に実現された国民的發展政策によって獲得された広範な同意はこの成功のせいである。この政策の特徴は、輸入品による加速的な工業化であった。依然として労働保護の社会的権利が与えられておらず、またその大部分が文盲であるため選挙権をもたない季節労働者と農民は、人民主義協定から除外されていた。この排除は、権力ブロックのうちに旧來の大土地所有者の寡頭層を留めることを可能にし、また工業ブルジョアジーをも助けた。産業予備軍を非常に拡大し、したがって都市勤労者の賃金を低く抑えたからである。人民主義の問題性を、グラムシの《受動的革命》と《トラスフォルミズモ》の概念に照らして再評価することがきわめて重要であろうと信ずる。

4. 《拡大された国家》の理論と現代のブラジル

グラムシが受動的革命の一特徴として《ヘゲモニー抜き独裁》と言ったとき、彼はこの歴

cia como valor universal に収めてある。pp. 121—101参照。

史的発展の様態をたどる社会的構成体の特徴の一つを指摘したのである。国家が《上からの》移行の用具であるならば、それはグラムシが——彼の《拡大された国家》の理論²¹⁾の文脈のなかで——《政治的社会》（支配と強制の軍事的・官僚主義的装置）と呼ぶものが、これらの構成体のなかで強化される傾向があるということであり、一方、《市民社会》（《私的》の装置の総体、ある階級または諸階級のブロックはこの装置をつうじて、ヘゲモニーと政治的・道徳的指導のためにたたかうのである）は従属的にとどまっている。とにかく、このような構成体は、《西方》よりも《東方》により近いであろう。

グラムシのこの《西方》と《東方》の区別が静態的に理解されるならば、そこからつぎのような不可避的な結論が生ずるであろう。まさにブラジルが採用した発展形態が受動的革命であるのだから、ブラジルの社会構成体は《東方》型であり、したがって《拡大された》国家の理論は、今日のブラジルに適用するわけにいかないであろう。グラムシの省察は、ブラジルの現実を理解するための寄与を、歴史学の水準にもたすだけであって、われわれの現在を分析し、われわれの将来のための選択を仕上げる点では価値をもたないであろう——あるいは、もつにしても部分的価値にすぎないであろう。しかし、この結論（それはとり残されたブラジルのマルクス・レーニン主義追随者によるこぼれるであろう）を受け入れるまえに、グラムシの《東方》と《西方》の定義をもっとくわしく検討すべきであろう。《東方》では国家がすべてであり、市民社会は初生的で、ゼラチン状であった。西方では、国家と市民社会のあいだに適正な関係があり、国家がゆらぐと、すぐに、市民社会の堅固な構造が姿をあらわした。国家は前方塹壕にすぎず、その背後には要塞と砲台の堅固な連鎖

21) 今日グラムシの国家理論にかんする文献はかなり普及している。私としては前出の *Gramsci* (pp. 87-102) と *A dualidade de poderes. introdução à teoria marxista de Estado e revolução*, São Paulo, Brasiliense, 1985, pp. 55 sgg. で論題に取り組んでいる。

があった。もちろん、それは国家により大小はあったが、まさにそのことが各国の正確な認識を必要としたのである。》²²⁾よく知られているように、この区別は、正確な実践問題に理論的解答をあたえる必要に当面してグラムシがねりあげたものである。ポリシェヴィキの戦略モデルが、ヨーロッパのより進んだ資本主義国で失敗した理由を説明することがそれであった。グラムシは、これらの国で国家が《拡大された》形態をとっていることを論証して、《東方》で妥当な（そのためロシアではうまく適用された）《運動戦》を、《西方》における社会主義のための闘争に妥当する戦略の《陣地戦》におきかえる新戦略を作成することができた。グラムシは地理的隠喩を利用しているのだから、《東方》と《西方》の区別を、静態的な事実として構想したものと仮定してよいと言うものがあるかもしれない。これ以上のまちはない。ある社会構成体の《西方性》は、彼にとり歴史過程の結果なのである。グラムシは《東方》型あるいは《西方》型の構成体の共時的存在を記録するにとどまらないうで、社会史的、通時的な過程をも指摘する。ある社会構成体が《西方的》になり、またはもつと具体的にいって、それが一つの《拡大された》国家をもち、そのなかで国家と市民社会のあいだに《適正な関係》があるということになる。1850年にマルクスとエンゲルスが考えた意味の《永続革命》（《運動戦》の一つの態様）の定式に言及したある節のなかで、グラムシはつぎのように述べている。《この定式は、大きな大衆政党と大きな経済的労働組合が、まだ存在しておらず、社会がまだ多くの面で、いわば流動状態にあった歴史的時期に固有のものである。》²³⁾ところが、しだいに、生産の社会化の過程の展開が、政治的参加の高まる社会化をひき起すにつれて、エリート的自由主義の時代、すなわち制限された参加を特徴とする時代に固有のこの《流動性》は新しい状況によってのりこえられた。そこでは《国家の国内

22) 《獄中ノート》, p. 866. 三一書房版《獄中ノート》 p. 193

23) 《獄中ノート》, 三一版, p. 201。

のおよび国際的な組織関係はいっそう複雑で、どっしりしたものになり、〈永続革命〉の48年定式は、政治学では〈市民的ヘゲモニー〉の定式にねりあげられ、のりこえられた。軍事技術に生じたのと同じことが、政治の技術のうちに生じている。つまり、運動戦はますます陣地戦となった。》²⁴⁾これが生じてくると——グラムシはこの転換をだいたいのところ1870年²⁵⁾としているが——ヨーロッパ社会は《西方化》し始める。いいかえれば、19世紀前半を特徴づける《せまい》国家が《拡大された》、《複雑な》、《どっしりした》ものになり、そこでは大衆の主体性が〈ヘゲモニーの私的装置〉の接続するネットワークの創設と言いかえられる。グラムシは指摘することをやめないが、このことは労働運動側の戦略変更を必要としたのである。

さきに引用した《ノート》の一節には、強調すべき点が二つある。第一に、グラムシは新しいマルクス主義国家理論、したがって新しい社会主義戦略の必要性を主張する。それが提起されたのは、《西方》社会と《東方》社会の共時的存在によるだけでなく、今日の《西方》社会の内部における二つの時期、つまり人民組織の弱さを標識とする時期と、政治の強度の社会化を特徴とする時期との通時的な差異にもよるのである。この意味で、グラムシは、《運動戦》が、あきらかに《東方》型の絶対主義国家または専制国家だけに妥当したのではなく、19世紀前半のエリート的自由主義国家にとっても妥当したこと、一方、《陣地戦》は近代民主主義国家に妥当するようになったと述べている。第二に、グラムシはこの意味で何も明言しているわけではないが、彼がヨーロッパ社会に固有のものとして記述している《西方化》過程が、ちがった時代に、後発的に、世界の他の地域でも生じうると考えたらしきと思われる。それは地理的に《東方》の国である日本の場合だけでなく、——ここでわれわれが大いに興味をもつことであるが——ラテン・アメリカの多数の国についてもそうであろう。

24) 同上 p. 201—202。

25) 同上 p. 201。

この点で、ブラジル社会は《東方》型の社会であるか、それとも《西方》型の社会であるかという基本的な問いに答えなければならない。言いかえると、《西方化》のダイナミズムが潜在的に普遍的な現象だという考えは受け入れられるか、ブラジルの場合この過程はどれくらいの成熟度に達しているか、ということである。答えはひろい幅の含意をふくんでいる。一方では、今日のブラジル社会にぴったりのマルクス主義的規定とするには不可欠の条件がある。他方では、ブラジルの左派が民主主義と社会主義のための闘争のなかでとらなければならない正しい戦略の選択は、この答えのいかんにかかるところが大である。

ブラジルの歴史的発展の全体像は——たとえ表面的であれ——帝国期全体と共和期の一部分をふくむ長い時期、国家と市民社会のあいだの関係について見るかぎり、ブラジル社会が、《東方》モデルに固有のつよい典型²⁶⁾を示している長い時期があった（それは受動的革命の諸過程の原因であり、また結果である）ことを示している。とはいえ、すでに帝国時代に、議会の存在によって必然となった諸政党がブラジルに存在していたことが明らかになっている。他方では、1889年の共和制の布告とともに、国家

26) Juan Carlos Portantiero はグラムシにかんするすばらしい論文 (*Los usos de Gramsci*, Buenos Aires, Folios Ediciones, 1983, pp. 124 sgg.) のなかで、ラテン・アメリカを《東方》とするか《西方》とするかという疑問を提出している。ポルタンティエロはグラムシにおける《西方》の二つの型のするどい区別を手がかりにして、より進んだラテン・アメリカ諸国（アルゼンティン、ブラジル、コロンビア、チリ、メキシコ、ウルグアイ、ベネズエラ）を《東方》社会として扱うことができないと主張し、これらの国は周辺的、後発的《西方》に特有な実例だとする。私はこの結論に完全に同意する。しかし、これらの国の《西方化》という疑いをいれない事実も、これらの国が歴史上のある時期に、主として《東方的》な特性を示していることは除外できないと信ずる。もっとも私はブラジルの例について立証したいと思っているが、独立いらい《西方》的要素が存在している以上、かなり独自の《東方》ではある。結局のところ、私とポルタンティエロの不一致は、根本問題をふくむものでなく、用語上のものにすぎないと確信する。

は形式上世俗的となり、カトリック教会はもはや《国家のイデオロギー装置》でなくなり、そのほかの少数教会と同じように、《ヘゲモニーの私的装置》²⁷⁾ に変わった。20世紀のはじめから、工業化過程の開始との関連で、人民的自己組織化の過程が労働組合の形成をもたらした。さらに、われわれが立ち合うことになるが、体制が公式に自由主義的であり、その限りで市民社会の萌芽の発展を可能にした割合に長い段階があった。だから、この意味では、ブラジルの社会的構成体は、けっして帝政ロシアや革命前の中国ほどに《東方》的ではなかった。われわれの過去には、われわれを19世紀前半のヨーロッパ自由主義社会に近づけるような特有の特徴がたくさんにあったのである。

だが、《東方》モデルとの類似点が優勢だと主張することを可能にしているのは、ついしばらくまえまで市民社会が《初生的でゼラチン状》であっただけでなく、国家が、前述の自由主義社会とちがって、つねにかなり強力であった事実である。たとえば、帝国時代をつうじて、議会、したがってまた政党の実際の役割は、かなり小さく、行政府や広大な官僚制機構によって押えられていた。奴隷制度の存在も忘れることはできない。それは住民の相当の部分からどんな権利も（市民権までも）とりあげ、のちに帝国時代のブラジル社会は主として《東方》²⁸⁾

的だという主張をなるほどと思わせるほどであった。

この状態は、奴隷制廃止（1888）と共和制布告（1889）によっても大きな変化をうけなかった。独立とおなじく共和制も《上から》の行動、人民大衆の積極的参加を妨げる軍事クーデタの結果であった。したがって、第一次共和制（1889—1930）のなかで優勢をしめた権力ブロックは、帝国時代と同様に寡頭制であり、ただ一つのちがいは、この寡頭制の内部ではコーヒー輸出と結びついた農業ブルジョアジーがヘゲモニー分派になったことである。このころつくられた共和派自由主義制度は、真の市民社会の発展を促進できるようなものでなかった。議会は、大統領政府制の採用によってつよめられた執行部のたんなる添え物にとどまった。たんに地方的規模しかもたない政党は地方寡頭制とその政治的トランスフォルミズムに奉仕する子分にほかならなかった。なお、プロレタリアートと中間層の自主組織化の試みにたいする公然たる弾圧の利用は、すでに第一次共和制下の不動の慣行であった。ブラジルはこの時期の大部分を《戒厳令》下で、憲法上の権利が廃止される状態のもとですごした。

だからといって、共和制とともに始まり、ことに20年代いごつよまった変化を無視するのはまちがいであろう。奴隷制の廃止と、そのあとの工業化の開始によって、資本主義はブラジルで支配的な生産様式となった。国の社会構造はいつそう複雑となり、近代的になった。もっともこの《近代》は、とくに農村では、前資本主義的後進性と密接に結びついていた。それでも新しい階級と新しい社会層は第一次共和制の寡頭権力に異議をとらえた。労働組合がふえ、経済的または政治的ストライキがふえた。中間層は政治生活へのより大きな参加を要求し、彼らの軍事的前衛である少壮将校団は武装蜂起の道をえらんだ。

この《下から》の圧力にたいする支配階級の反応の仕方は、もう一つの受動的革命、いわゆる1930年革命の実現であった。これをつうじて——先にも見たように——農業寡頭層のより穏

27) 《国家のイデオロギー装置》の概念は、周知のようにルイ・アルテュッセルのもの (*Idéologie et appareils idéologiques d'Etat*, in *Positions*, Paris, Editions Socialas, 1976, pp. 67—125)。しかし、当のアルテュッセルも強調しているように、この概念をグラムシの《ヘゲモニーの私的装置》（この装置への参加が自発的であって、強制的でないからこそ私的なのだが）と混同することはできない。グラムシの概念は、狭義の国家にたいする私的装置のより大きな自主性を前提とするのであるから、アルテュッセルの概念は、国家がまだ《拡大》されていない社会、つまりまだ《西方化》過程を経験していない社会におけるイデオロギー装置を特徴づける場合にしか適していないように思われる。

28) ブラジルの帝国期のすばらしい分析が Marco Aurélio Nogueira, *As desventuras do liberalismo* に見られる。それははっきりとグラムシの諸範疇を利用している。

健な部分が権力ブロック内のヘゲモニー的地位を手にいれ、それと同時に中間層指導部中の穏健派翼、すなわち少壮将校団をこれに組み入れた。この《上から》の解決は、そのまへの10年間に発展しはじめていた西方化の諸傾向を部分的にさまたげた。しかしそれは部分的にすぎなかった。さきに私はブラジル史上のこの時期につき、とくにバルガス独裁をまねいた条件について述べた。ここではブラジルにおける資本主義的近代化が、30年代、とりわけバルガスの《新国家》期のあいだにつよまったことを記録すれば足りる。自主的市民社会の客観的前提が創出された。その主観的な結果（すなわち、国家から独立したヘゲモニー装置の形成）は、バルガスの独裁のもとで生じたように、たしかに弾圧の過程を経た。しかし、それ自体としてこれらの前提はもはや除くことはできなかった。

1945年に独裁が倒れ、民主主義への復帰とともに（たとえ制限はあっても）、ブラジル社会の《西方化》過程は、いっそうすっきりしてきた。合法性に復した共産党は、はじめて（これまでただ一度）大衆党となり、10%の得票があった。このとき生れたその他の政党は、全国的規模とよりはつきりしたイデオロギー的面貌をそなえるようになった。労働組合もまた国の経済生活と政治生活のなかでますます重要になってきた。いくつかの逆行的エピソード（1947年におけるブラジル共産党の非合法化）にもかかわらず、ブラジル社会の《西方化》傾向はひきつづき優勢となり、1955—1964年期につよまった。

この傾向は、ブラジルの歴史上のより長い独裁の始まりとなった1964年のクーデタによってはつきりとブレーキをかけられた。その結果として生れた軍事体制は、とりわけ1968年の《再度のクーデタ》のあと、あらゆる手段に訴えて市民社会の自主的組織の粉碎に努めた。それと同時に、国家の異常な強化（その抑圧装置だけでなく、経済に介入するための多種多様のテクノクラート機関をも強化）は、国家と市民社会のあいだの関係の《均衡破壊》を促進し、見たところあまり《西方》的でないようにした。し

かし、それにもかかわらず、市民社会は、ときどき手ひどく弾圧されはしたが、つねに片隅で自主性を保ってきた。それだけではない。70年代後半から、それは増大し多様化した。このとき、自主組織化のつよい要求が、労働者、農民、婦人、青年、中間層、知識人、ついにブルジョアジーの主要な部分まで巻きこんだ。共和国大統領の直接選挙をもとめる大衆運動で、500万のものが街頭にのりだし、軍事独裁の最終的敗北に決定的な役割をはたし、タンクレド・ネベスとホセ・サルネを当選させ、市民社会の強化過程の頂点となった。この過程の規模はブラジルの歴史上前代未聞であった。

市民社会が独裁体制のもとで成長し拡大するという外見上のパラドックスをどのように説明することができるか？何よりもまず思いだされるのは、この体制が、強制を、また1969—1976年代にとくにそうであったが、国家テロリズムをさえさかんに利用したにもかかわらず、決して古典的ファシズム独裁ではなかった、つまり、組織された大衆的基盤をもつ²⁹⁾反動体制ではなかったことである。軍人—テクノクラート層に依拠しながら、この体制は、市民社会内で現実のヘゲモニーをかちとることができず、イタリアやドイツで成功したように装置を全体主義国家の《伝導ベルト》としてはたらかすこともできなかった。もしこれをファシズムと言うならば、バリントン・ムーアが戦前の日本に適用した《上からのファシズム》³⁰⁾の用語が受けいられる場合だけである。独裁は、最小限の同意をかちとるために、議会（無力にされてはいたが）と反対党のブラジル民主主義運動を認容しないわけにいらなかった。この運動はしだいにすべての反独裁勢力の大きな政治戦線に転化したのである。なるほど、体制は広大な住民地帯の同意をかちとることに専念した。しかし、求められ、時には得られた同意はいつも受動的

29) このファシズム観は、周知のようにグラムシが起源で、パルミロ・トリアッティが *Lezioni sul fascismo*, Roma, Editori Riuniti, 1970でふかめたもの。

30) Barrington Moore Jr., *Le origini*, cit. pp. 487 sgg.

なもので、大衆の原子化を前提し、下から独裁に積極的支持をあたえるような組織体をつうじて表現することのできないものであった。要するに、体制は「動員力のない」ものであった。そのイデオロギー的正当化はファシズム型でなかった。それどころか一種の「反イデオロギーのイデオロギー」、つまり「効率」をイデオロギー一般に、政治闘争に対置するテクノクラシー的プラグマティズムであった。それは「国民を分断」し、そうしておいて軍人が求める「安全」つまり経済発展の条件を危険にさらすおそれがあった。

1974年に現われてきた「経済的奇蹟」の危機いらい、この正当化の試みは、1974年、1978年と1982年の議会選挙で独裁がこうむった敗北によって立証されるように、しだいに揺らいできた。独裁は、中間層のあいだだけでなく、これまで決定的に支持してきた独占ブルジョアジーのいくつかの地帯でも、同意の基盤を急速に失った。この深刻な正当化の危機を背景として、市民社会の装置は、共産主義者から「開明」保守派にいたるまでの広範な反独裁勢力の主導のもとに、ふたたび日の目をみるようになった。「魔法使」が解きはなった力は、もはや手におえなくなった。独裁は強度に近代化的経済政策を実行することによって、目をみはるような生産力の発展を推進した。ブラジルは「革命一復古」にまもられて、国家独占資本主義の段階に入った。有業人口にかんするすべての数字、国民総生産等々は、1964年いらい近代化過程の急激な強調を示している。この近代化は、同時に保守的でもあるとはいえ、帝国主義への依存や地域的不均衡や所有と所得の不均衡な分布を維持した深めながら、ブラジル社会の「西方化」の客観的前提を、もはや後もどりのできないように強化した。

客観的前提は、グラムシの反決定論的マルクス主義が教えているように、いっそう有力な論拠をもって主観的結果を意味するものではない。ブラジルの市民社会を決定的につよめることのできる有効な主役性をきずくためには、政治の社会化をひろげるための闘争のなかで、まだ長

い道をすすまなければならない。サルネの新政府がはじめた現在の移行過程の運命は、この闘争の成否にかかっている。それが「下から」の民衆の圧力と、「上から」のトラスフォルミズモの作用との組み合わせの結果であるのにしたがって、その到達点は、真の大衆民主主義の創造であるかもしれず、旧来のエリート的自由主義の復活であるかもしれない。しかし、あの場合にしても、経験的に確かめられる事実（労働組合員数、基礎の自治体の成長、合法政治団体数）は楽観論を是認しないではない。だから、ブラジル市民社会の強化と言うにしても、政綱を提出するだけでなく、それと同時に、経験的に確かめうる現実の事実³¹⁾を記録することである。受動的革命がたどった道からすれば、ブラジルは「西方」社会になっている。

ここで生まれるのが旧左翼に固有の第三インタナショナル的解釈モデルの危機である。もしブラジルが今日「西方」社会であるとすれば、「運動戦」、国家の強制装置との正面衝突、みじかい時間に集中される暴力的爆発として理解される革命的断絶を中軸とする移行形態を想像することはできない。ブラジルでも多様な党と組織にわかれ、グラムシ戦略の本質的教訓を吸収した事実を共有する近代的左翼が現われはじめた。人民勢力の目的は、困難で長びいた「陣地戦」のなかでヘゲモニーをかちとることである。ブラジルの場合にこのことは多元的民主主義の強化と、場合によりその「大衆民主主義」への移行³²⁾が、出発点として、またわれわれの

31) たとえば1936年の労働組合員数は1,448,151人に達したにすぎないが、1983年になると、目を見はるような農村労働組合化のせいで、すでに1400万人をこえた。ブラジル労働組合連盟のもっとも発展した3つの州（サンパウロ、リオデジャネイロ、ミナス・ヘライス）をとってみると、1963年のストライキ件数は149であったのに1983年には277に達していた。1970年から1980年までの10年間にブラジルの大学出入口は394,427人から819,927人にふえた。1960年に39.37%であった文盲率は1980年には25.50%に下った。民衆の組織化傾向については、1964年と1968年のあいだに、リオデジャネイロ市で71の居住組織がつくられた。1979年と1981年のあいだにこの数は166に達した。

32) 大衆民主主義の概念については Pietro Ingrao,

民主主義的社会主义への道の不変の条件として考えられていることを意味する。

グラムシの思想は、「受動的革命」と「トラスフォルミズモ」の概念をつうじて、われわれの過去を解釈するためだけでなく、「拡大された国家」の観念をつうじてわれわれの現在を分析し、「陣地戦」の戦略的指示をつうじて民主主義と社会主義のための闘争の戦略をねり上げるためにも、示唆を提供することができるように思われる。ここで、今日のブラジルにおけるグラムシ思想の異常な影響力と、とくにブラジル左翼の関心をあつめている自己批判と今日化の過程で展開している基本的役割の根源が求められている。しかしブラジルでグラムシを「受け入れ」、これをブラジル語に「翻訳」しようと努めている人びとは、彼のもっとも輝かしい方法論的指摘の一つを忘れることはできない。グラムシは、「西方」と「東方」の差異についての直観をレーニンが、早死によって深めることを果せなかった事実を嘆いたうえ、真のマルクス主義思想家の「基本的任務」を明らかにした。「イリイチは、彼のこの定式を深める時間がなかった——基本任務が国民的であったのに、つまり地形を偵察し、市民社会の諸要素に

よって代表される塹壕や要塞の諸要素を確定すること等々が必要であったのに、彼は定式を理論的に深めることができたにすぎない……〔この地形は〕国家により大小はあったが、まさにそのことが各国の正確な認識を必要としたのである」。³³⁾

〔訳者後記〕

1985年9月11—13日にわたり、イタリアのフェルラーラ市グラムシ研究所の主催で「ラテン・アメリカの政治的諸変革：ラテン・アメリカ文化におけるグラムシの存在」を主題とする国際セミナーがひらかれた。Jos'e Aricò, N. G. Canclini, A. Velez Pliego, M. Lagarde, J. C. Portantiero, A. Cordova, J. Nun, T. Petkofo らとともにリオ・デ・ジャネイロのBennet 大学教授の C. N. Coutinho が最終発言をした。ラテン・アメリカの代表的なグラムシ研究者の集会として注目されたものであるが、隔月刊のイタリア共産主義者の理論誌 *Critica Marxista* がそれらの発言のうち紙幅の関係で二篇を第5号にのせた。本稿はその一つである。

Masse e potere, Roma, Editori Riuniti, 1977 を参照。

33) 「獄中ノート」, 三一版, p. 193.